

障がいのある方のその人なりの自立を目指して ～地域と共に生きる共生社会の実現～



ダンウェイ株式会社（障がい者就労支援、ICT、クリエイティブ、教育事業）代表取締役社長

高橋 陽子 / たかはし ようこ

E-mail info@danway.co.jp http://www.danway.co.jp/

神奈川県川崎市中原区新城 1 丁目 12 番 15 号

電話 044-740-8837 F A X 044-740-8838

経歴

(省略)	民間企業の総務・人事部門
2010 年 4 月～	ダン社会保険労務士事務所開業（特定社会保険労務士） 川崎市豊かな地域療育を考える連絡会 所属 ひまわり～ノーマワールドの会～ 設立（市民事業）
2011 年 1 月	ダンウェイ株式会社 設立
2011 年 4 月～	神奈川県立鶴見養護学校 評議員（2013 年度 継続）
2012 年 4 月～	川崎市教育委員

地域と共生した障がい者の自立を支援

障がいのある方のその人なりの自立をめざし、彼らの良いところを見つけ、可能性を最大限伸ばしていきたいと、「育てること」をテーマに、2011 年 1 月にダンウェイ株式会社を設立しました。

設立の経緯は、息子の障がいがあったことをきっかけに、特別支援学校を卒業した後、障がいのある方を育てる機関が少なく、もし育てる機関があったら、もっと彼らの可能性が広がる、待っていないで、「まずは自分からやってみよう」と思ったからです。

また、障がいのある方のその人なりの自立の実現に必ず必要な、「地域共生の実現」を目指すため、たくさんの地域の方と触れ合う場所に会社を立地することを決めました。事務所を探すにあたり、最初は障がい者支援事業に対する理解が得られず、何件も契約を断られました。仕方なく自宅を事務所に使うことも考えていたところ、幸い現在の事務所のオーナーの方にご理解頂き、駅前商店街のすばらしい立地条件に事業所を構えることができました。本当に感謝しています。

固定概念の払拭をするため、株式会社に！

「障がいのある人＝仕事ができない」という社会の固定概念を払拭するため、自らの会社で営利の事業を

起こし、その事業を成功させ、自らがモデルとなって、「誰にでも可能性がある」ことを証明するために、株式会社にて運営する決意をしました。

事業の成功とともに、世の中によい成果物をだして、結果的にかかわっていた人が障がいがあったとってはじめて、彼らの職域拡大が図れるのだと思ったからです。

自らがその役になろう！そう決意し、現在は、障がい者就労支援事業（福祉事業）の他、クリエイティブ事業、ICT 事業、教育事業を展開しています。



障がいのある方でも直感的にできる ホームページ制作ソフト「ICT 治具」 の開発実現！

障がいのある方の職域拡大のため、障がいのある方でも直感的に迷わずに操作ができる、ホームページ制作ソフト「ICT 治具」の開発を実現しました。数人が力をあわせ、得意な分野毎に役割分担して 1 つの制作をすることも可能とし、初期開発は、インテル様の協働により、開発を実現しました。「治具」とは作業位

置を指示・誘導する器具を意味し、要件定義は指示の入りにくい知的障がいのある方に焦点を絞ったことで、皆にとってユニバーサルデザインとなりました。ログインは、動物と乗り物の絵合わせから始まり、指示は信号の色にあわせ、「青」は進む、「赤」は止まるなどと連動した意味をもたせました。最後に、パズルのピースを並べるようにするとページが完成します。複数の人が得意な分野を活かせるよう、分業しやすい仕組みとスケジュール管理機能も載せました。ICTの利活用とともに、障がいのある方の職域拡大を1つ1つ進めていきたいと思っています。現在、特例子会社（障がい者雇用を主とした会社）や、中小企業、学校教材、高齢者の方々にも活用いただいています。



いつも支えられている障がい者が中小企業を支える役に

昨今、日本の中小企業は非常に厳しい状況にあります。しかしそんな中でも、設立当初より、私達を支えてくれた中小企業の社長たちがいました。そんな彼らに、なんとか恩返ししがたくて、情報発信の苦手な中小企業の支援とともに、障がいのある方の職域拡大の実現、かかわる誰もが成長できるよう、いつも支えられている障がい者が中小企業を支えることにより、川崎から日本、そして世界へと、日本のよいものを、ICT 治具とともに発信していく役割になってほしいと思っています。

社会的大きな課題の解決

福祉事業としての障がい者支援にかかる福祉財源は、現在莫大にかかっています。

これから障がい児・者の増加や、超高齢化社会への突入などによる社会的構造の変化からなる福祉財源の増加より、このまま何もしないでいると、福祉財源は枯渇し、子どもたちの将来への危機感が増すばかりです。このように、財源に限りがある中で、今までのように行政頼みのスタンスでは社会は崩壊するでしょう。まずは1人1人ができることから行動し、福祉財源（税金）を、障がい者を育てるという生きた財源に変え、障がい者を含む雇用を創出できるといったように、良い方向へのスパイラルを生み出すことを実現し

たいのです。その結果、「障がい者のその人なりの自立」の実現につながり、社会がつくる「障害」という壁がなくなる日がくることを願い、日々挑戦していきたいと思っています。

子どもたちが教えてくれたこと

私の息子は小学校4年生で、地域の学校の特別支援学級に通っています。知的障がい、自閉症、多動etc. 小学校に入学する前、まわりのたくさんの大人からは、通学時には「（多動だから）絶対に手を放すな。まわりのお友達に怪我をさせてしまっては大変だから。」といわれ、子どもの手をしっかり握って学校にいていました。

6年間のうちに、お友達と一緒に学校にいたらという希望をもって、私と息子の他、3人の子どもたちと一緒に通学していました。何度も息子の手を放すことにチャレンジしましたが、なかなかうまくいかず1年生の3月を迎えました。ある日の朝、1人の子がこういいました。「〇〇さんママ、いつまでも手をつないでいたら、〇〇さんはいつまでたっても一人で学校へいけないよ。今日から手を放そう！1日目は1目の電信柱まで、2日目は、、、」という、3人で力をあわせ、泣き叫び、暴れる息子の手を私の手から放して、すぐにその後の息子の行動を予測して隊列を組み、なんなく息子を連れていってしまいました。そして息子は、約2週間で私の手を放して皆とともに学校へ行くことができるようになりました。子どもたちの後ろのほうからついていった私は、やっと落ち着いて広い視野になることができ、その時みた光景は、「子どもたちは皆、元気よく走り回っていた」ということでした。その場には、ほとんど大人はいませんでした。

「大人はいったい何をみていたのだろうか？」「私は何を気にしていたのだろうか？」1年間を振り返ってみると、一緒にいていた子どもたちは、息子を自立させたい！という気持ちからの行動というより、純粋に、「〇〇さんはずるい。だって、自分たちだって、ママやパパと一緒に学校にいきたくても我慢しているのに。」という気持ちからだったということに気が付きました。なぜなら、息子の手をつないでいない、空いている方の手を、彼らは順番につないでくることが多々あったからです。子どもたちはピュアであること、時に子どもたちの世界にまかせること、そして1人1人の可能性を信じることの大切さを、私は子どもたちから学びました。

これからも、手を出しすぎず、出さな過ぎず、子どもたち、そして障がいのある方の自立支援にかかわっていききたいと思っています。